

## 神の国に入るには

（ルカによる福音書18：15～17、詩 編131：1～3）

今朝の礼拝では、ルカによる福音書18章15節から17節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「子供を祝福する」と言う小見出しがついた個所が説教のテキストになります。日本では、子供の成長に伴い、七五三のお祝いをします。男子は三歳と五歳に、女子は三歳と七歳にあたる年の十一月十五日にお祝いをします。大抵は、神社に行って、お祓いを受け、健やかな成長を祈願します。私たちの教会でも、幼児祝福式と言って、日曜学校や幼稚園で、この時期行うのが普通になって来ました。子供の健やかな成長を願うのは、当然の親心で、教会がこれに応えるのも、これもまた当然だ、と言ってよいのではないのでしょうか。その際、読まれるのが、今日の箇所なのです。今日の箇所には、他の福音書にも平行記事があって、多くの場合、マルコによる福音書10章13節から16節までの箇所が読まれます。と言うのは、そこには、はっきりと、「イエスは、・・・子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された」と記されていて、司式をする牧師は、これに倣って、子供の頭に手を置き、神の祝福を祈る、と言う行為の、その聖書的根拠を、先ずもって明らかにするためです。しかし、同じルカの記事では、余分なものは一切そぎ落とし、スリムにして、この前の個所『『ファリサイ派の人と徴税人』のとえ」と、密接な繋がりを持たそうと致しました。ルカは、ルカによる福音書を編むに当たり、元々あった、子供を祝福された主イエスについて記した資料を、ルカ独自の意図のもとに、編集し直して用いた、と言うわけなのです。同じ記事でも、福音書によって、多少の違いがあるのは、そのためなのです。

前置きはこれくらいにして、早速、今日の箇所の学びに取り掛かりたいと思います。今日の箇所は、こう書き出されています。「イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た」。ここ15節で、「乳飲み子」と訳されている原語は、「ブレフォス」と言うギリシャ語で、それは、「胎児」、「新生児」、「幼児」を意味します。次の16節にも、「乳飲み子」と言う言葉が出て来ますが、実は、その原語は、前の「ブレフォス」とは違うのです。こちらの原語は「パイディオン」と言い、子供を意味する「パイシ」の指小詞、つまり、子供の中でも、小さい子供を指す言葉であって、「(生まれたての) 幼児」から、小児或いは児童、更には、少年・少女までも含むことができ、年齢的に言えば、0歳から12歳位までを、指し得る言葉なのです。だから、16節で、「パイディオン」を「乳飲み子」と訳しても、少しも間違いではないのです。ところが、17節で、「子供のように神の国を受け入れる人でなければ」と言われる場合の、この「子供」と訳されている原語も、また、「パイディオン」なのです。要するに、この個所で言われている「子供」とは、親の庇護なしには、まだ一人では、生きることができない年齢の者、その全部をひっくるめて、「子供」と言っている、と、そう理解すればよいのではないのでしょうか。

この時、主イエスのもとに、乳飲み子を連れて来たのは、「人々」であった、と言われていきます。だから、乳飲み子を連れて来たのは、必ずしも母親だけとは限らず、父親も一緒だったかも知れませんが、中には、祖父祖母も同伴するか、或いは、彼らが孫の幸せを願い、両親に頼まれてか、独自の判断でか、乳飲み子を連れて来た、と言う例だってあった

かも知れません。山上憶良（やまのうえのおくら）の歌の中に、「白銀も 黒金（くがね）も玉も 何せんに 勝れる宝 子にしかめやも」という有名な歌がありますが、山上憶良に限らず、誰にとっても、子供は、「子宝」と言って、宝物なのです。だから、何が起こるか分からない、この人生、子供には、神の加護が常にあって、最後まで神の祝福の中を歩んでほしいと願うのは、親ならば、また、祖父母ならば、極々自然のことです。しかし、ここでは、人々は、主イエスの許にやって来て、何よりも、主イエスに、その手で直接触れていただくことを願いました。勿論それは、神の祝福が与えられることを具体的に表す、象徴行為なのですが、主イエスの場合、“触れる”と言う行為には、それ以上の意味がありました。

ルカによる福音書5章12節以下には、主イエスが、以前私たちが用いていた口語訳聖書では、ライ病と訳されていた、今の新共同訳聖書では、重い皮膚病と訳されている、その病の患者を、自らの手で、直かに、その人に触れ、お癒しになった、と言う記事が出て来ました。昔は、誰もが、近づくことすら避けた程に、恐れられたライ患者に、主イエスは、躊躇いなく、すぐさま、直接に、手で触れて、お癒しになったのです。同じ、ルカによる福音書8章40節以下には、一種の婦人病で、12年間も出血が止まらず、苦しんだ女性が、群衆に紛れ込んで、後ろから、主イエスに近づき、やっと手を伸ばし、主イエスの服の房に触れた途端、出血が止まった、と言う記事が出ていました。こちらは、女性の方から、密かに、気付かれぬよう手を伸ばして、主イエスの服の房に触れたのですが、しかし、主イエスは、直ぐにそれに気付かれました。と言うのは、主イエスの体から、その瞬間、力が出て行ったからです。主イエスに触れると言っても、一方通行的には、癒しは起こらないのです。そこでは必ず、主イエスとの人格的な交わりが惹き起こされるのです。主イエスに触れ、思い掛けない癒しに与り、それ以後の人生を一変させられた、二人の人の例を今、引きましたが、主イエスに触れていただく、或いは、主イエスに触れる、と言うことが、どれ程大きな出来事を惹き起こすか、私たちは、これらの記事によって、よく知ることができるのではないのでしょうか。日本語に、「手当」と言う、大変良い言葉があります。病気になった時、それを処置する場合、「手当てをする」と、言います。手を当てるのです。つまり、触れるのです。その時、傷は癒え、そして、同時に、心も癒えるのです。人間の場合でさえ、それは大きな力を発揮するのです。況してや、主イエスが、その手をもって、私たちに触れてくださるとすれば、人生が一変しても、何も可笑しくはないのではないのでしょうか。

以上見て来たように、確かに、親にとって、子供は宝です。でも、子供が、半人前扱いをされ、軽視されるのも、また、否定できない厳然たる事実です。聖書でも、例えば、出エジプト記12章37節では、エジプトを出発したイスラエルの民の数を述べるに当たって、「妻子を別にして、壮年男子だけでおよそ六十万であった」と言われ、女性と子供は、イスラエルの民の数には入れられてはていないのです。マタイによる福音書14章13節以下に記されている、五つのパンと二匹の魚を主イエスが祝福され、その後、それを分け合って食べ、皆が満腹したと言う、あの「五千人の給食」の記事では、最後、「食べた人は、女と子供を別にして、男が五千人ほどあった」と、そう締め括られています。ここでも、女と子供は、五千人の数の中には入れられてはいないのです。日本でも、昔は、子供のことを餓鬼と呼んだり、男尊女卑的な社会の中、「女子供」と、一括りにして蔑んで呼ぶ、極めて差別的な表現が、当然のように使われていました。子宝、と言う言葉とは、相矛盾することですが、しかし、これもまた、紛れもない、社会の現実だったのです。こうした歪んだ観念に毒されていた主イエスの弟子たちは、人々が、乳飲み子を主イエスのもとに連

れて来た時、「これを見て叱った」と言います。「ここは子供なんかの来るところではない」と、彼らは怒り、追い払おうとしたのです。「親の心、子知らず」とは、正に、このことで、この機に及んでも尚、弟子たちは、主イエスのお心を、本当にはよく理解していなかったのです。ユダヤ教の一般的な考え方は、律法を行うことによって、人間は、初めて神より祝福を受けられるのであって、律法を知らず、これを弁えず、従って、行わない子供が、神より祝福を受けられるはずはない、と言うもので、弟子たちは、未だに、そうしたユダヤ教の一般的な考え方に、色濃く染まっていたのかも知れません。

しかし、これを見て、主イエスは、逆に彼らを叱り、乳飲み子たちを呼び寄せ、こう言われました。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と。普通、神の国に入る、等と言えば、最難関の学校にでも入るように、さぞや、大変な努力を要し、沢山のことを覚え、難行苦行を積みねばならないのだろう、と考えられがちです。しかし、主イエスは、ここで、それとは真逆のことを言われるのです。と言うのは、先ずは、「はっきり言うておく」と、殊更に力説されて、「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と言われたからです。「子供のように」とは、一体、どう言うことを言うのでしょうか。無知であってよい、と言うことなのでしょう。それでは、教育の必要がなくなってしまう。では、子供のように純真であれ、と言うのでしょうか。でも、子供だって、時には、我儘で、我を張り通し、意地悪でもあって、平気で仲間を苛（いじ）めたりもします。その際、可成り残酷なことだって、平気の平左やっつてのけます。「裸の王様」と言うお話に出て来る子供のように、大人ならば中々言えない、「王様は裸だ！」と、本当の事を言える正直さが、確かに、子供にはあります。でも、常にそうだとは言えません。平気で嘘をついたり、都合の悪いことに関しては、人目を誤魔化しり、隠し事もします。と言うようなわけで、主イエスが、ここで、子供のように、と言われたのは、子供が時に見せる、純真さ、正直さ、素直さ、と言ったような、性格や特徴を言ったのではないのです。それは、先にも述べた、親の庇護なしには一人では生きていけない、と言う、その状態とその自覚を言ったのです。この個所の直前で、私たちが学んできた『ファリサイ派の人と徴税人』のたとえの徴税人によって、典型的に示された人の姿です。彼は、神殿に上って祈るのですが、本殿からは遠く離れて立ち、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら、ただ、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と、祈りました。彼には、自分を価値づけ、神の前に持ち出し、自慢できるようなものは、何一つなかったのです。彼の唯一の支えは、ただ、神の憐みだけでした。その反対に、徴税人には、神の前でさえ、誇り得るものが沢山ありました。何より、「奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく」、モーセの十戒を忠実に守り、それだけに留まらず、更に、それ以上に、「週に二度断食をし、全収入の十分の一を献げている」と、誇らかに、語り得たのです。彼には、神の憐みなど必要はなかったのです。自分の義、その正しさに満足し、神の国があるとすれば、寧ろ、向こうから、ぜひ入ってください、と、頭を下げて頼みに来るくらいに思っていたのです。でも、神の国は、そのような驕った者の国ではなく、自分には誇るべき何もなく、ただ、神の憐みだけが唯一の頼りだ、と、これにだけ信頼する者の国なのです。

ところで、神の国とは、地上のどっかに存在するわけではなく、キリストと共に到来した神の愛の御支配のことを言い、すべての人がそれに招かれているのですが、何も持たない者がやすやすと入り、沢山誇るべき物を持っている者が中々入れないのは、入る条件が、この世とは、逆さまになっているからなのです。ベツレヘムに、イエス生誕教会と言う教

会が建っているのですが、その入り口は、とても低く、また、狭いのです。沢山の物を持ったまま、中に入ることはできないのです。入ろうとすれば、すべてを外に置いて、身を低くして、入らなければならないのです。これは、我々が死ぬ時と、よく似ているのではないのでしょうか。私たちは、何も持たないで生まれて来たのです。死ぬ時もまた、何も持たないで去って逝くのです。最近、断捨離という言葉も、よく耳にするようになって来ました。高齢化社会が進み、家族制度も半ば崩壊し、自分のことは、死後の始末も、自分でしなければならなくなり、それに伴い、まだ元気なうちに、できることはしておこう、と、“断捨離”などという言葉も、盛んに使われるようになってきたものと想像されます。神の国に入るのは、古い自分に死に、新しい自分に甦って生きることでもあるのですから、やはりここでも、断捨離は必要となるのです。でも、何もかもなくせば、心細くなりはないか、と、私たちは、遂、先のことを案じるのですが、ジョン・ウエスレーが言ったように、「私たちは、神を持つことによって、すべてを持つ」ことになるのですから、何も持たないようでありながら、大富豪のように、すべてを持つことになるのです。だから、一切心配はいらないのです。

私たちは、この説教に先立ち、聖書朗読の折り、旧約聖書からは、詩編の131編が読まれるのを聞きました。あそこでは、こう歌われていました。「主よ、わたしの心は驕っていません。わたしの目は高くを見ていません。大き過ぎることを/わたしの及ばぬ驚くべきことを、追い求めません。わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように/母の胸にいる幼子のようにします」と。この詩編は、1節の最初に述べられていた詞書（ことばがき）には、「都に上る歌、ダビデの詩」と書かれていましたが、彼（か）の徴税人の祈りを引き延ばせば、この詩編のような言葉になったのではないのでしょうか。

アウグスチヌスは言いました。「わたしたちは、神に向かって造られたのだから、神の懐に憩うまでは、全き平安を得ない」と。油断のならない、狡猾な悪魔の策略には、蛇のように聡くあって、果敢に立ち向かわなければなりません。しかし、神に対しては、どこまでも、その憐れみに信頼して、鳩のように素直で、また、幼子のように全身を委ね切って、安んじて生きて行きたいものだと思います。

(三輪恭嗣)